

N0.62 2011年4月13日

すてきなあなたへ

編集 佐倉市宮ノ台女性井戸端会議

～3・11 東日本大震災特集～

発行 佐倉市宮ノ台 4-26-8

Tel & Fax 043-461-7004

地震、また、地震

2月半ば、夫と2人でニュージーランド南島の北部と西海岸をレンタカーで訪ねる旅に出た。クライストチャーチからハンマースプリング、カイコウラ、ピクトン、ネルソンと回り、ここでクライストチャーチ大地震のニュースを見た。それからは毎日、朝夕のニュースにくぎ付け。ハグレー公園の仮設テントで何日間か過ごす人も多かったようだが、支援体制がしっかりしている感じがした。その後、ネルソン湖国立公園、ウェストポート、グレイマウス、アーサーズパスを通り、クライストチャーチに戻った。市の中心部、レンガの建物は壊滅的。立入禁止区域の外側を一周したが、この街が河川の運んだ土砂の上につくられていることがよくわかる。毎日余震でよく揺れた。

3月11日早朝、オークランド経由で成田に向かう。午後4時30分到着のはずが、飛行機は旋回をくり返し、結局、関西空港へ。機長が津波のことを言っていた。関空からレンタカーで帰ることとし、夜の8時ごろ出発。私はカーナビを見、夫が運転して、名古屋から中央道を通り、22時間かかって、やっと我が家に着いた。途中、中央道を走る自衛隊のトラック、宝塚・西宮の消防車、救急車に数多く出会った。旅先で地震に遭い、帰国時にも地震に遭う、何とも言えないめぐりあわせの旅だった。(H)

被災と支援の気持ち

東日本大震災の被災者の皆様、お見舞い申し上げます。

連日の報道では、これまで耳にすることのなかった数字や事実、目にすることのなかった映像が飛び込んできました。私たちユウカリが丘・宮ノ台の住民は、あれほどの深刻な被害からは免れましたが、日ごろの防災意識を省みることになりました。水道の地下水利用や防災井戸の意義や管理の重要性も知らされました。地域や行政の防災体制の弱さも露呈したようです。原発の根底も揺るがしています。

3月20日前後、この街のディベロッパが、自治会を通じてお米1.5キロを一斉に配布しました。お見舞いというなら、当時、避難所で食料もままならぬ生活を強いられている方々に、その善意を届けてほしかったです。県内でも住む家を失った方々、そして市内の施設に福島から避難されている方々もいます。

他の地域にならって、自前の施設を提供する支援もできるのではないかしら。

帰宅困難者になって

座席の下から突き上げられるような衝撃、大きく揺れる車体に、いったい何が起きたか分からなかった。窓の外では、架線の束が大きく回っている。まもなく「地震のため停車しました」の放送があった。渋谷から新宿に向かう山手線、代々木駅を出たところだった。あちこちからネットの情報がささやかれる。夫は娘にメール、勤め先で無事であることを確認。座席の左右の人のケータイ画面を見せてもらって、地震の概要を知った。やがて車内の電気が消える。1時間20分ほどカン詰めの後、先頭車両まで歩き、駅まで線路上を歩けば、三陸地方の津波、九段会館で死者などの断片的な情報が、飛び交う。代々木駅は人でごった返し、改札口付近の大型テレビで、地震の大きさを知り、駅員からは一切の鉄道が動いていないことを知らされる。

キオスクのパンやおにぎりはすでに売り切れ、お茶のボトルのみ調達できた。まず新宿まで歩いて、最悪、池袋の私の実家まで歩こうか、ということになった。帰宅できないとなると、留守番の犬のことが気がかりで、ご近所の方をお願いと思ってメールをするが、もうすでに通じなくなっていた。歩行者の数はどんどん増え、沿道のビルの外壁や窓ガラスの破片が歩道に散らばり、商品が散乱している店舗もあった。新宿駅南口付近は、人の塊が動いているという感じだった。警官や駅員があちこちに立つが、騒然とした午後5時30分。公衆電話はどこも長蛇の列、それでも5・6人のところがあつたので、犬の件だけはと並んで、ともかくお願いすることができてほっとする。友人の話では、佐倉も相当の揺れだったものの、停電や断水はないとのことだった。実家への連絡は、とうとう取れずじまいだった。

明治通りをひたすら歩く。車道は、道幅一杯の車の渋滞、歩く人の数は膨らみ、ノロノロしか歩けなくなる。向かい側も歩道いっぱいの人群れが反対方向に動く。副都心線、西早稲田駅の灯りを横目に、みな黙々と歩く。サンシャインビルが見え隠れするようになってもかなりの時間が過ぎた。池袋東口到着、午後7時35分だった。

いまは、義姉一人が住まう実家に突然転がり込んだ格好だ。熱いお茶をごちそうになりながら、テレビの余震情報と被害状況を目の当たりにする。娘も今夜は会社に泊まることになった由、ようやく固定電話で話げできた。(M)

岩名青少年センターに救援の品々を届けると

佐倉市の被災者支援はこれでいいの？

やむにやまれず、ご近所の何人かで佐倉市役所の防災担当課に出かけた。すでに福島から避難されてきた方々が暮らしている岩名青少年センターで、手伝えることがあればと相談したかった。私たちに対応した「危機管理監」の第一声は、「センターには職員が交代で常駐、被災者からのニーズには十分応えているので、お引き取り下さい」というものだった。避難の方々は、初めての土地で不安で、不自由な日々を過ごされていないか、少しでも被災者の気持ちに寄り添った支援をと思い、交流ができればと思ったのだ。担当者は、避難者はまだ落ち着いていない、いまは会いたくないと言っていると、私たちとの面談を拒み続けていた。では、持ち寄った品々を届けるだけでもと申し出ると、「品物は私が届けるので預かる」とまでいう。やや呆れて、災害ボラ

ンティアセンターを立ち上げたという社会福祉協議会を訪ねたが、皆さんの申し出を受ける用意ができていない、センターの避難者から特段の要望もない、とそっけない。

ともかく、センターに出向くことはだけは了解をとって、持ち寄ったものを職員に手渡した。施設を去ろうとしたとき、いわきナンバーの車に近づく被災者の男性に出遭った。私たちのことは知らされず、面談を断った覚えもないという。ご自身の避難の経緯やここでの暮らしについても快く話してくださった。台所は付いているが、ほとんど外食で、早くふつうの食事をとりたい、そして、家族用の住まいを探したい、と切望されていた。

そのとき、公用車 2 台が施設に横づけにされ、支援物資を搬入し始めた。名札を下げた市民部長がコメや野菜を運ぶ。それを追う二人のカメラマン、おまけに CATV296 の車も到着、市役所から呼ばれたようだ。このパフォーマンスのために、私たちは「人払い」されたのかも。後味の悪い市や社協の対応だった。(3月28日記、U)

八千代市ふれあいプラザ～被災避難者のため、開放

友人から、八千代市焼却炉の隣にある「ふれあいプラザ」が避難所となり、当分使えないと聞いた。近道を行けば、10分足らずの場所にある市民憩いの場で、浴場、温水プール、図書ラウンジ、料理講習室と畳敷きの大広間が3室ある。以前、アスレチック室を市外料金で利用した事がある。

4月7日の午後に行ってみた。玄関には3月23日～4月22日まで避難所となるので、閉館と貼紙があった。玄関横の事務所では職員が数人いて、いつも通りの感じであったが、施設内はひっそり静まり返っていた。避難所について伺いたいと申し入れると係りがいるので3階に行くようにと丁寧に対応された。係りは若い女性の方で市役所の総合防災課や災害対策本部に問い合わせをしながら、こちらの質問に快く答えてくれ、被災者が泊っている大広間まで案内してくれた。

腰高のダンボールで所帯ごとに囲われた部屋を見たが、現在6世帯(12人)と少なくゆったりとしていた。多いときは18人いたとのこと。朝・昼の食事は自力で調達との事だが米、野菜等の差し入れがあり、夕食は申し込めば赤十字奉仕団のボランティアが作ってくれるそうで、エプロンをかけた数人の女性とすれ違った。ここは一時避難場所、市内に住宅を借りて移り住んだ人も、今探している人もいて、職員が不動産屋等を案内しているようだ。上高野工業団地の中にあることもあり、求人の募集もあるそうで、被災者の事情を考え、紹介していくとの事であった。

八千代市は他に保品にある「少年自然の家」でも受け入れを準備している。ここはプラネタリウムまである教育施設であるが、洋室20、和室2と200人以上が泊れるようになっている。八千代市では2つの施設を併せ約230人(80人+150人)が受け入れ可能としているが、被災者が自力で来なければならぬため、避難者は少人数にとどまっている。「ふれあいプラザ」では、日頃、高齢者が風呂上りに涼んだり、本を読んだり、幼児が遊んだり、プールに入ったりして、にぎやかな場所だが、今は人影もまばらで、もったいない感じがした。全面的に閉館するのではなく、避難場所としての空間を確保しながら開館する方が、被災された方の孤独感を癒す事にも繋がるのではないかと考えながら帰ってきた。(4月7日記、K)

菅沼正子の映画招待席 34

ブルーバレンタイン

—愛が生まれる時と壊れる時—

映画を見た帰りの電車の中でも、込み上げてくる涙は止まらない。なんとも切ない家族の物語だ。

結婚7年の夫婦。6歳の娘と3人暮らし。妻のシンディ（ミシェル・ウィリアムズ）は努力して看護師に。夫のディーン（ライアン・ゴズリング）は定職についていない。人はいいけれど、のんびり屋で、ビール片手にペンキ塗りのアルバイト。だからといって、生活費を妻に頼っているわけではない。娘の面倒見はいい。娘もよくなついている。けれどシンディは、近ごろなんとなくブルーな気分。夫との仲がどうもしっくりいかない。仕事が忙しくて、疲れているのかもしれない。夫の向上心のなさにもイライラする。口論も多い。

このような夫婦、最近では世界中どここの国でも珍しくない、ごくありふれた夫婦の姿のような気がする。こうした2人の愛の変貌をフラッシュバックで描き、愛の不可解さ、家族の大切さについて、若い監督は情熱をもって語りかける。

愛し合っていたころは、指が触れるだけでも胸はときめき、欲望を抑えることはできない。やがて妊娠。でもディーンの子か、前の恋人の子か、中絶を考えるシンディに「家族になろう」とプロポーズするディーン。彼のやさしさが感情を揺さぶる。ところが7年の間に愛は手からすりぬけていく。原因も理由もわからないけれど、いまは指が触れるだけでも、みぞおちが痛くなる。

夫婦は別れられても、子どもはどうする。幼い純真な心を納得させる言葉はあるのだろうか。

私たちの親の世代では、子どものため、世間体のため、母親がじっと耐え、家族崩壊の危機を救ってきた。ところが1970年代ごろからは、男女平等、女性の自立が叫ばれ、もう女性だけが我慢することはないという時代になった。女性の社会進出はめざましく、「翔んでる女」という言葉が流行語になったほど。

「クレイマー、クレイマー」（1979年）は自立する母親が家庭を捨てて家を出ていった。

子どもの親権はどうする、という問題になると私がいつも思い出すのは、「わかれ道」（1964年）だ。キング牧師の公民権運動が世論を動かした時代で、この映画もテーマは人種偏見。黒人と再婚したために可愛い子どもを取り上げられてしまう母親の悲しみを描いている。幼い娘が「ママ、あたしは悪い子？なぜよそへやっちゃうの？いい子にしてるから、パパやママと一緒にいさせて」と、2度3度と母親を打つ、あのシーンがいまでも私の胸を痛める。

（4月23日より、TOHOシネマズシャンテほか全国ロードショー）